

アメリカ映画における日本人の新しいイメージ

菊川 和彦

1. はじめに

1989年10月9日号の Newsweek の表紙はソニーによるコロムビア映画買収の話題を受けて日本の芸者が自由の女神像のスタイルで右手にたいまつを掲げているイラストが大きく描かれていた。⁽¹⁾ 日本企業のアメリカ進出（侵略？）を皮肉ったものと思われるが、しかしなぜ、たとえコロムビア映画のシンボルマークが自由の女神とはいえアメリカを代表する雑誌の一つが日本の経済進出というテーマを何の関係もないゲイシャ・ガールを描いて表現するのであろうか。しかしながらアメリカ映画においてはこの種の日本を表す方法が多く見られるのである。アメリカの映画産業はこのゲイシャ・ガールに象徴されるようなアメリカ人の一方的な思い込みをそのままスクリーンの上に具現化し、そしてアメリカ大衆の間にステレオタイプ化された日本人のイメージをつくりあげる役目を担ってきたと考えられる。この日本のイメージをアメリカの著名な雑誌がアメリカの読者に強く日本を意識させるために利用したとしても不思議ではない。

ただ Newsweek と映画との間にはその姿勢において大きな違いがある。Newsweek のような雑誌、加えて新聞、テレビニュースなどの報道メディアにおいてはプロのジャーナリストや知日派の学者が多少の誤解や偏見があるにしてもそれなりに評価できる日本の情報を責任の所在をはっきりさせてアメリカの大衆に送り出す。しかしながら娯楽という性格を持つ映画の世界においてはプロデューサー、ディレクター、シナリオライターなど日本に関する知識の有無を問われない人々がアメリカの大衆に向かって、日本人に対する自分たちの思い込みを（たとえそれが誤解や偏見そのものであっても）スクリーンの上で自由に表現することが許されている。言い換えれば報道メディアが、ある程度事実に基づいた表（建て前）の対日イメージを示しているのに対して、映画はアメリカ大衆の持つ一方的な思い込みとしての裏（本音）の対日イメージを反映しているとも考えることもできる。

本研究はこの点にスポットをあててアメリカ大衆の本音としての対日イメージをハリウッド映画をとおして探ろうとするものである。ただし今回試みようとしているのは現代の日本のイメージであるため研究対象としてのアメリカ映画は原則として戦後製作されたものでしかも現

代を舞台としている作品とし、サムライ、軍人など過去の日本に存在したものを描いているアメリカ映画は特殊な設定を除いて今回の調査の対象から外した。

2. アメリカ映画の影響力

さてアメリカ大衆の間にある種の日本のイメージをつくりあげられると思われる映画はアメリカ国内においてどのような影響力を持った存在なのであろうか。1988年の全米における映画の興行総収入は43億8千万ドルで、⁽²⁾観客動員数は1985年以降、毎年約10億人を超えている。⁽³⁾これは全米約2万軒の映画館へ2億4千万人のアメリカ人が年4回以上足を運んでいることを意味している。⁽⁴⁾たとえば現在までの興行収入1位のバットマン('89)は今日まで2億5,000万ドルを稼ぎだし、平均入場料を\$5として計算すると約5,000万人のアメリカ人を動員したことになる。⁽⁵⁾このように日本では斜陽となっている映画も娯楽とはいえアメリカ国内では相当の影響力を持っていることがわかる。

さらにアメリカ人が映画を観るのは劇場だけとは限らない。現在アメリカには映画専門のケーブルテレビ(Pay-TV)局がいくつもありその中で最大のPay-TV局 Home Box Office (HBO)は1,450万世帯、Show Timeは1,000万世帯と契約を結んでいるので映画はこの分野でも多くのアメリカ人に鑑賞されている。⁽⁶⁾さらにビデオ化された映画は好きな映画を好きな時に観ることができるという点において劇場公開やPay-TVの映画より手軽に楽しめるという利点がある。VCR(VTR)の普及率は1988年すでに60%を超えており、⁽⁷⁾ビデオ映画はレンタル、販売を問わず既に一般化された現象であり、1989年の後半(9月—12月)だけでレンタル映画は6億ドル以上稼ぎだす産業に成長している。⁽⁸⁾このようにアメリカ人は一本の映画を劇場で公開されたあと、ビデオ、Pay-TV、そして部分的にカットされるとはいえ一般のテレビ番組として何度も観るチャンスがある。従ってアメリカ社会において映画はもしその中に日本人が登場する機会があるとすれば新聞や雑誌と同じく対日イメージの形成に大きな影響を与えているといえよう。⁽⁹⁾

3. 今回調査の対象となったアメリカ映画

今回調査の対象としたのはジャンル別にA(コメディ、20作品)、B(アクション、12作品)、C(SF、7作品)、D(ドラマ、6作品)、E(その他、3作品)計48作品でB級映画(製作費が安く、二本立てで上映されることの多い映画)についてはBBBの印を、また日本人が主役又は準主役で登場する映画についてはJJJの印を末尾に付した。

A(コメディ、製作年度順)

A-1 The Geisha Boy('58) 底抜け慰問屋行ったり来たり(ジェリー・ルイス)

菊川：アメリカ映画における日本人の新しいイメージ

- A-2 Breakfast at Tiffany's ('61) ティファニーで朝食を (オードリー・ヘップバーン)
- A-3 My Geisha ('62) 青い眼の蝶々さん (シャーリー・マックレーン)
- A-4 The Ugly Dachshund ('66) 猛犬にご注意 (ディズニープロ)
- A-5 Foul Play ('78) ファール・プレイ (ゴールディ・ホーン)
- A-6 Private Benjamin ('80) プライベート・ベンジャミン (ゴールディ・ホーン)
- A-7 Cannonball Run ('81) キャノンボール (ジャッキー・チェン, バート・レイノルズ)
- A-8 Bachelor Party ('84) バッチェラー・パーティー
- A-9 Revenge of Nerds ('84) ナーズの復讐
- A-10 Rhinestone ('84) クラブラインストーン～今夜は最高 (ドリー・バートン, シルベスター・スタローン)
- A-11 National Lampoon's European Vacation ('85) ナショナル・ランプーン・ヨーロッパ・バケーション (チェビー・チェイス)
- A-12 Gung Ho ('86) ガン・ホー JJJ
- A-13 Down & Out in Beverly Hill's ('86) ビバリーヒルズ・バム (ニック・ノルティ)
- A-14 Police Academy 3 ('86) ポリスアカデミー 3
- A-15 Blind Date ('87) ブラインド・デート (ブルース・ウィリス)
- A-16 Police Academy 4 ('87) ポリスアカデミー 4
- A-17 Who's That Girl ('87) フーズ・ザット・ガール (マドンナ)
- A-18 Tax Season ('87) マルサ・アカデミー BBB
- A-19 Crocodile Dundee 2 ('88) クロコダイル・ダンディー 2
- A-20 Big Business ('88) ビッグ・ビジネス (ベット・ミドラー)
- B (アクション)
- B-1 Enter the Dragon ('73) 燃えよドラゴン (ブルース・リー)
- B-2 The Yakuza ('74) ザ・ヤクザ (高倉健, ロバート・ミッチャム) JJJ
- B-3 Enter the Ninja ('81) 燃えよニンジャ (ショー・コスギ) BBB JJJ
- B-4 The Karate Kid ('84) ベスト・キッド (パット・モリタ) JJJ
- B-5 Death Ride to Osaka ('85) 大阪殴り込み作戦 BBB
- B-6 L. A. Street Fighters ('85) L. A. ストリート・ファイターズ BBB
- B-7 Armed Response ('86) 地獄の武装都市・復讐のターミネーター BBB
- B-8 The Karate Kid 2 ('86) ベスト・キッド 2 (パット・モリタ) JJJ
- B-9 Die Hard ('88) ダイ・ハード (ブルース・ウィリス)
- B-10 Steven Seagal Nico ('88) 刑事ニコ
- B-11 Fatal Beauty ('88) 危険な天使 (ウーピー・ゴールドバーグ)

B-12 Black Rain ('89) ブラック・レイン JJJ

C (SF)

C-1 Blade Runner ('82) ブレード・ランナー (ハリソン・フォード)

C-2 The Adventures of Buckaroo Banzai ('84) バカルー・バンザイ

C-3 Swordkill ('84) SF ソードキル BBB JJJ

C-4 Eliminators ('86) エリミネーター BBB

C-5 Surf Nazis Must Die ('86) 悪魔の毒々サーファー BBB

C-6 The Toxic Avenger Part 2 ('88) 悪魔の毒々モンスター東京へ行く BBB JJJ

C-7 Back to the Future 2 ('89) バック・トゥ・ザ・フューチャー2

D (ドラマ)

D-1 Tatto ('80) タトゥー彩られたわな BBB

D-2 Half Moon Street ('86) ハーフムーン・ストリート (シガニー・ウィーバー)

D-3 Fatal Attraction ('87) 危険な情事 (マイケル・ダグラス)

D-4 Captive Hearts ('87) 男たちの賭け (パット・モリタ) JJJ

D-5 Aloha Summer ('88) アロハサマー

D-6 Tucker ('88) タッカー (ジェフ・ブリッジズ)

E (アニメ, 音楽, ホラーなど)

E-1 ('44) グーフィーの船乗り教室 (ディズニーアニメ)

E-2 Moonwalker ('88) ムーンウォーカー (マイケル・ジャクソン)

E-3 Poltergeist ('88) ポルターガイスト3

これらの映画の中で日本国内のレンタルビデオ (日本語字幕付) による調査の37作品は (A-2, 4, 5, 8, 9, 10, 11, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, B-2, 3, 5, 6, 7, 8, 10, 11, C-2, 3, 4, 5, 6, D-1, 2, 3, 4, 5, 6, E-1, 2, 3) で、劇場における調査の8作品は (A-6, 7, B-1, 4, 9, 12, C-1, 7) である。またアメリカで国内で販売されているビデオを調査対象にしたものが (A-12)、アメリカ国内で放映されている Pay-TV による調査のものが (A-3)、日本のテレビで放映されたものが (A-1) で、(A-1, 4) 以外はすべてノーカット版で調査を行った。例外的作品としては (D-4) が時代設定が1940年代、(E-1) は製作、設定とも1940年代である。

4. 伝統的な日本及び日本人のイメージ

ゲイシャ・ガールに代表される伝統的な日本のイメージは今回調査の対象となったアメリカ映画48作品の中に数多くみられる。日本女性のシンボルとなっている着物姿の女性は13作品(A-1,3,5,12,15,17,20、B-2,3,8、C-3,4,6)に登場し、そのうち5作品(A-3,5,15,17、B-3)には芸者または芸者スタイル(日本髪と着物)の女性が描かれている。しかし登場場面が適切であるか否かという点に関してはフランス料理店に人妻が芸者姿で登場したり(A-15)、日系の銀行の中を日本髪で着物姿の客が大勢で歩いていたりして(A-17)、我々日本人としては理解に苦しむこともある。これはたぶん一般のアメリカ人が芸者と着物姿の女性との区別がよくできていなかったり、着物を着るTPOをよく理解していないためにおきる現象と思われる。これらの作品を観てもわかるようにいくつかのアメリカ映画は、日本女性はいつも着物ばかり着ているような印象をアメリカ人に与えているのではなかろうか。

また日本庭園も日本をイメージするシンボルとして9作品(A-3、B-2,3,4,5,8,9、C-6、D-5)の中で描かれているが、中にはダイ・ハード(B-9)のように近代高層ビルの最上階にまで日本庭園を造りあげる日本人が描かれていて、少し奇異な感じを与えないでもない。また忘れてならないのは着物や日本庭園がスクリーンに登場する時には、しばしば琴や笛の音が挿入されていることであり、視覚と聴覚によるワンセットの日本イメージがアメリカ人のなかに既にできあがっていることを示している。以上がアメリカ映画に登場する最もポピュラーなタイプの日本のイメージであるが、そのほかにも寿司(A-10、C-3、D-1,3)、富士山(A-1、B-2)、盆栽(B-4、C-6)、大仏(A-1)、神社(C-6)など日本の自然や文化が日本情緒を増すための味付けとして時折り紹介されている。

今まで述べてきたのはどちらかと言えば女性的な日本及び日本人のイメージといえるが、目を男性的なものに転じてみるとまず「サムライ」イメージの名残りとして剣道着姿の男性が5作品(B-1,2,12、C-2、D-5)で描かれている。またアメリカの空手ブームを反映して空手の

A (コメディ) A-1 The Geisha Boy A-2 Breakfast at Tiffany's A-3 My Geisha A-4 The Ugly Dachshund A-5 Foul Play A-6 Private Benjamin A-7 Cannonball Run A-8 Bachelor Party A-9 Revenge of Nerds A-10 Rhinestone A-11 National Lampoon's European Vacation A-12 Gung Ho A-13 Down & Out in Beverly Hill's A-14 Police Academy 3 A-15 Blind Date A-16 Police Academy 4 A-17 Who's That Girl A-18 Tax Season A-19 Crocodile Dundee 2 A-20 Big Business B (アクション) B-1 Enter the Dragon B-2 The Yakuza B-3 Enter the Ninja B-4 The Karate Kid B-5 Death Ride to Osaka B-6 L. A. Street Fighters B-7 Armed Response B-8 The Karate Kid 2 B-9 Die Hard B-10 Steven Seagal Nico B-11 Fatal Beauty B-12 Black Rain C (SF) C-1 Blade Runner C-2 The Adventures of Buckaroo Banzai C-3 Swordkill C-4 Eliminators C-5 Surf Nazis Must Die C-6 The Toxic Avenger Part 2 C-7 Back to the Future 2 D (ドラマ) D-1 Totto D-2 Half Moon Street D-3 Fatal Attraction D-4 Captive Hearts D-5 Aloha Summer D-6 Tucker E (アニメ、音楽、ホラーなど) E-1 グーフィーの船乗り教室 E-2 Moonwalker E-3 Poltergeist

使い手が5作品(A-7,14、B-4,8、C-5)に登場しあたかも日本人の多くが空手の達人であるかのような印象を一般のアメリカ人に与えている。さらに相撲取り(A-3、C-6、B-1)やふんどし姿(A-12、C-6、D-1)、忍者(B-3、C-4)なども場違いな設定が多いものの男性的イメージの一部として登場する。日本男性のイメージの中で気にかかるものはメガネ(A-2,6,12、C-6)釣り目(A-2、E-1)、出っ歯(A-2、C-6、E-1)という特徴でメガネ以外は70年代以降少なくなったもののいまだに散見されるのは残念である。

以上伝統的な分野の日本及び日本人のイメージを総合的にみれば日本女性がしとやかで美しく日本庭園や富士山など自然の世界のものと同じく魅力的な存在としてスクリーンの上で描かれているのに対して、日本男性はどちらかといえば魅力に乏しくやや野蛮なものとして描かれているように感じられる。言い換えればいまだにアメリカ人は「フジヤマ・ゲイシャ」的日本(日本女性、日本の自然、日本の文化、芸術など)を少なくともスクリーンの上では肯定的に受け止め、空手以外の日本男性のイメージは否定的に見ているのではあるまいか。

5. 日本人の新しいイメージ

芸者や富士山など伝統的な日本のイメージのほかに日本が経済大国として世界に知られ始めてから現れた新しい日本のイメージも見逃すことはできない。まずはじめに「お金持ちの日本人」というイメージがアメリカ映画の中で広がりつつあるといえよう。3作品(A-15,18、B-9)の中で企業の社長としての日本人が登場し、8作品(A-5,8,10,11,19、D-2,5、E-2)の中で海外旅行をしている日本人が描かれている。実際、統計においても1987、1988年と日本は国民一人当たりのGNPでアメリカを抜いて先進7ヶ国中2年連続で首位を保ち⁽⁹⁾、出国者の数は1988年が843万人(うち北米へは297万人)で1989年は1,000万人が予想されている⁽¹⁰⁾。後もこの傾向が続く限り「お金持ちの日本人」のイメージはアメリカ映画の中で益々強調されていくものと思われる。ただし気になることは旅行者として登場する日本人が英語が下手で(A-5,9,10,15)、

A (コメディ) A-1 The Geisha Boy A-2 Breakfast at Tiffany's A-3 My Geisha A-4 The Ugly Dachshund A-5 Foul Play A-6 Private Benjamin A-7 Cannonball Run A-8 Bachelor Party A-9 Revenge of Nerds A-10 Rhinestone A-11 National Lampoon's European Vacation A-12 Gung Ho A-13 Down & Out in Beverly Hill's A-14 Police Academy 3 A-15 Blind Date A-16 Police Academy 4 A-17 Who's That Girl A-18 Tax Season A-19 Crocodile Dundee 2 A-20 Big Business B (アクション) B-1 Enter the Dragon B-2 The Yakuza B-3 Enter the Ninja B-4 The Karate Kid B-5 Death Ride to Osaka B-6 L. A. Street Fighters B-7 Armed Response B-8 The Karate Kid 2 B-9 Die Hard B-10 Steven Seagal Nico B-11 Fatal Beauty B-12 Black Rain C(SF) C-1 Blade Runner C-2 The Adventures of Buckaroo Banzai C-3 Swordkill C-4 Eliminators C-5 Surf Nazis Must Die C-6 The Toxic Avenger Part 2 C-7 Back to the Future 2 D (ドラマ) D-1 Totto D-2 Half Moon Street D-3 Fatal Attraction D-4 Captive Hearts D-5 Aloha Summer D-6 Tucker E (アニメ、音楽、ホラーなど) E-1 グーフィーの船乗り教室 E-2 Moonwalker E-3 Poltergeist

菊川：アメリカ映画における日本人の新しいイメージ

集団で行動し(A-8,11,19)、カメラをぶらさげている(A-19、E-2) ことである。日本人の下手な英語や集団行動は他の作品にもいくつか見受けられるのでこれらはアメリカ人の間に定着し始めている新しいイメージといえよう。

次に最近顕著になってきたもう一つのイメージとして「好色な日本人」というイメージがあり今回取り上げた映画の中では9作品(A-6,8,11,14,15,16,18、B-5、D-2)の中で強調されている。例えばバッチェラー・パーティー(A-8)のように中年男性の団体が下着姿でホテルの部屋でコールガールを待っている場面があったり、ナショナル・ランプーン(A-11)のようにストリップ劇場に大挙して押しかけている日本人の団体の姿が紹介されたりしている。また日本男性が白人女性に弱い一面もポリス・アカデミー3(A-14)やハーフムーン・ストリート(D-2)などに描かれていて日本男性の白人女性コンプレックスを暗示している⁽¹⁰⁾。好色イメージに輪をかけて日本男性のイメージを悪くしているのは、彼等が女性を軽視又は蔑視する態度がいくつか描かれていることである。ガン・ホー(A-12)では大切な話をするとき女性に席を外させ、ブラインド・デート(A-15)では日本における男性中心の夫婦関係(妾制度など)が描かれ、プライベート・ベンジャミン(A-6)ではお金を渡してデートを申し込むなどアメリカ女性に反感を持たせるような日本男性の態度が合計7作品(A-6,8,12,15、B-5、D-2,4)で描かれている。

「好色でお金持ち」という日本人のイメージのほかに「お人好しで、子供っぽく、だまされ易い」といういわゆる"sucker"イメージも日本人につきまとう。ファール・プレイ(A-5)やクラブ・ラインストーン(A-10)のように日本人乗客はタクシーの運転手の言いなりになったり、ナーズの復習(A-9)では日本の留学生がポーカーのルールを知らずにお金を巻き上げられるなど"sucker(カモ)"としての日本人が11作品(A-5,8,9,10,12,14,16,19、B-4,8,11)で描かれている。スクリーンの上で笑いものにしても怒る人が少ないという理由で日本人が選ばれるのかも知れないが反日感情の裏返しとして理解することもできる。

以上は一般の日本人のイメージであるが裏の世界の日本人のイメージとして最近台頭してき

A (コメディ) A-1 The Geisha Boy A-2 Breakfast at Tiffany's A-3 My Geisha A-4 The Ugly Dachshund A-5 Foul Play A-6 Private Benjamin A-7 Cannonball Run A-8 Bachelor Party A-9 Revenge of Nerds A-10 Rhinestone A-11 National Lampoon's European Vacation A-12 Gung Ho A-13 Down & Out in Beverly Hill's A-14 Police Academy 3 A-15 Blind Date A-16 Police Academy 4 A-17 Who's That Girl A-18 Tax Season A-19 Crocodile Dundee 2 A-20 Big Business B (アクション) B-1 Enter the Dragon B-2 The Yakuza B-3 Enter the Ninja B-4 The Karate Kid B-5 Death Ride to Osaka B-6 L. A. Street Fighters B-7 Armed Response B-8 The Karate Kid 2 B-9 Die Hard B-10 Steven Seagal Nico B-11 Fatal Beauty B-12 Black Rain C (SF) C-1 Blade Runner C-2 The Adventures of Buckaroo Banzai C-3 Swordkill C-4 Eliminators C-5 Surf Nazis Must Die C-6 The Toxic Avenger Part 2 C-7 Back to the Future 2 D (ドラマ) D-1 Tatto D-2 Half Moon Street D-3 Fatal Attraction D-4 Captive Hearts D-5 Aloha Summer D-6 Tucker E (アニメ、音楽、ホラーなど) E-1 グーフィーの船乗り教室 E-2 Moonwalker E-3 Poltergeist

ているものに「ヤクザ」イメージがある。日本のヤクザは殺し屋、武器の密輸、売春組織などからんで6作品(B-2,5,6,7,12、C-6)で登場するがヤクザにはこれらの中でホラー映画まがい小指を切断し(B-2,7,12)、刺青を見せ(B-2,5,6,12、C-6)、刀を振り回し(B-2,6,12)その残虐性を余すところなく披露している。気になるところは今までB級アクション映画を中心に登場していた日本のヤクザがブラック・レイン(B-12)などのようにハリウッドの大作にも登場し始めたことであり、¹³⁾このことは日本社会におけるヤクザの存在が広く一般のアメリカ人に認知されていることを意味している。

その他の日本人の新しいイメージとしては6作品(A-6,12,17、B-9,10、C-7)でコンピューター会社、銀行、商社などに勤める日本のビジネスマンが「エコノミック・アニマル」イメージに関連して登場するが、彼等の多くは無口で真面目で哀しいほど会社に忠実である。さらに見逃せないのはメカニック・マニアとしての日本人のイメージである。コンピューター、カメラ、自動車、多機能時計など子供がおもちゃで遊ぶ姿そのままにメカマニアとしての日本人の姿が12作品(A-6,7,12,19、B-9,10、C-1,2,4,7、D-6、E-2)で描かれており、バック・トゥー・ザ・フューチャー2ではMr. Fujitsu(富士通)という名前の日本人まで登場する。これらのイメージはアメリカ市場における日本製品の氾濫からきていると思われるが映画の中の役柄を見る限り「機械しか取り柄のない日本人」というイメージがアメリカ人の間に広がっているのではないかと想像される。

最後にアメリカ映画の中で日本人と日系人の区別があまりされていないという点と一部の映画しか見られない現象であるが日本(人)と中国(人)を混同している(A-7,18、B-7,12)という点を指摘しておきたい。フォーチュン・クッキー(おみくじいりのクッキー)製造会社の社長が日本人であったり(マルサ・アカデミー)、自転車に乗った工場労働者の大群がいたり(ブラック・レイン)、ジャッキー・チェン(香港のカンフー映画のスター)が東京からやって来た日本のドライバーで4WDのスバルでレースに参加する場面などがあるが、これらは製作者側の無知(無視?)を示しているといえよう。

A (コメディ) A-1 The Geisha Boy A-2 Breakfast at Tiffany's A-3 My Geisha A-4 The Ugly Dachshund A-5 Foul Play A-6 Private Benjamin A-7 Cannonball Run A-8 Bachelor Party A-9 Revenge of Nerds A-10 Rhinestone A-11 National Lampoon's European Vacation A-12 Gung Ho A-13 Down & Out in Beverly Hill's A-14 Police Academy 3 A-15 Blind Date A-16 Police Academy 4 A-17 Who's That Girl A-18 Tax Season A-19 Crocodile Dundee 2 A-20 Big Business B (アクション) B-1 Enter the Dragon B-2 The Yakuza B-3 Enter the Ninja B-4 The Karate Kid B-5 Death Ride to Osaka B-6 L. A. Street Fighters B-7 Armed Response B-8 The Karate Kid 2 B-9 Die Hard B-10 Steven Seagal Nico B-11 Fatal Beauty B-12 Black Rain C (SF) C-1 Blade Runner C-2 The Adventures of Buckaroo Banzai C-3 Swordkill C-4 Eliminators C-5 Surf Nazis Must Die C-6 The Toxic Avenger Part 2 C-7 Back to the Future 2 D (ドラマ) D-1 Totto D-2 Half Moon Street D-3 Fatal Attraction D-4 Captive Hearts D-5 Aloha Summer D-6 Tucker E (アニメ, 音楽, ホラーなど) E-1 グーフィーの船乗り教室 E-2 Moonwalker E-3 Poltergeist

菊川：アメリカ映画における日本人の新しいイメージ

以上アメリカ映画に現れた日本人の新しいイメージを総合すると、お金持ちで好色で、あるときはカモの旅行者、あるときは会社中心のビジネスマンでさらに機械好きで、なかにはヤクザもいる日本人のイメージが浮び上がる。伝統的分野のイメージの中心がフジヤマ・ゲイシャというソフトなものに比べて、新しいタイプの日本人のイメージは少なくともアメリカ映画の中ではハード(過激)と言えるほど悪いイメージが主流となっているのではあるまいか。

6. まとめ

これまで伝統的な日本人のイメージと新しい日本人のイメージについて述べてきたがここで視点を改めて調査の対象となった全作品についてそれぞれの作品が全体として日本人を好意的にとらえているか、中立的にとらえているか、それとも反日的(偏見、悪意などが感じられるもの)にとらえているかについて考えてみたい。作品全体が日本人に対して好意的と考えられるものは5作品(B-4,8、C-3、D-4,6)、中立的と考えられるものは20作品(A-1,3,4,12,13,14,16,17,19,20、B-2,9,10,11,12、C-2,7、D-1,3,5)、そして反日的と考えられるものは23作品(A-2,5,6,7,8,9,10,11,15,18、B-1,3,5,6,7、C-1,4,5,6、D-2、E-1,2,3)であった。この分類でもわかるように日本人が主役または準主役として登場する映画(JJJ、9作品)については日本人は好意的(5作品)または中立的(3作品)に描かれる場合が多い。これは製作する側が日本についての下調べをよく行っているということと、ある程度製作者の側が日本市場での反応を考慮した結果といえるかも知れない。またB級映画(BBB、9作品)については2作品(C-3、D-1)を除いてすべて反日的に日本人が描かれている。これは製作費を抑えるため調査を十分に行わずに製作されているとも考えられるが、また別の見方をすれば日本人が観る機会がまれない映画については悪意や偏見に満ちて、またはほぼステレオタイプのまま日本人が描かれているといえないこともない。ある意味ではアメリカ大衆の本音としての日本人イメージはB級映画の中に見つけることができるかも知れない。

これまで述べてきたように本研究で取り上げた48種のアメリカ映画の中に登場する日本人は

A (コメディ) A-1 The Geisha Boy A-2 Breakfast at Tiffany's A-3 My Geisha A-4 The Ugly Dachshund A-5 Foul Play A-6 Private Benjamin A-7 Cannonball Run A-8 Bachelor Party A-9 Revenge of Nerds A-10 Rhinestone A-11 National Lampoon's European Vacation A-12 Gung Ho A-13 Down & Out in Beverly Hill's A-14 Police Academy 3 A-15 Blind Date A-16 Police Academy 4 A-17 Who's That Girl A-18 Tax Season A-19 Crocodile Dundee 2 A-20 Big Business B (アクション) B-1 Enter the Dragon B-2 The Yakuza B-3 Enter the Ninja B-4 The Karate Kid B-5 Death Ride to Osaka B-6 L. A. Street Fighters B-7 Armed Response B-8 The Karate Kid 2 B-9 Die Hard B-10 Steven Seagal Nico B-11 Fatal Beauty B-12 Black Rain C(SF) C-1 Blade Runner C-2 The Adventures of Buckaroo Banzai C-3 Swordkill C-4 Eliminators C-5 Surf Nazis Must Die C-6 The Toxic Avenger Part 2 C-7 Back to the Future 2 D (ドラマ) D-1 Totto D-2 Half Moon Street D-3 Fatal Attraction D-4 Captive Hearts D-5 Aloha Summer D-6 Tucker E (アニメ、音楽、ホラーなど) E-1 グーフィーの船乗り教室 E-2 Moonwalker E-3 Poltergeist

多くの場合、反日的、またよくても中立的に描かれることが圧倒的に多く残念ながら好意的に描かれることは珍しい。さらに男性、女性と分けて考えてみると伝統的イメージ、新しい日本人のイメージの両分野とも男性側が悪く描かれることが多い。以上二点が映画の中に登場する日本人の特徴であるが、アメリカの文化や社会に関心を持つ者は映画を単なる娯楽としてかたずけるまえにアメリカ映画の中に現れる自分たちのイメージについて注意を払っておくべきであろう。なぜなら日本とアメリカの関係が経済分野を中心に悪化しつつある今日、新聞やテレビに出てこないアメリカ人の本音がそこに形を変えて現れてくるかも知れないからである。また同時に映画の中に日本人の悪いイメージが現れるのをただ観察しているのではなく、経済的活躍ばかりでなくもろもろの文化的活動をもっと活発に行ってアメリカの一般大衆に少しでも良いイメージを広めていくべきではなかろうか。そうでなければ今後とも醜い日本人がスクリーンの上に次々と登場し、日本人のイメージをさらに悪くしていくであろう。

注

- (1) *Newsweek*, October 9 1989, cover page.

1983年の *TIME* (日本特集号) もその表紙は富士山の絵柄の着物を着ている芸者であった。 *TIME*, August 1, 1983, cover page.

- (2) 「ソニー米社買収の波紋」『朝日新聞』、1989年10月6日号、9頁。前年は42億5千万ドルであった。筈見有弘、「活況見せる米映画界」『朝日新聞』、1988年2月20号(夕刊)、4頁。

- (3) Richard Gertner, ed., *1987 International Motion Picture Almanac, 58th ed.*, New York: Quigley Publishing Company, 1987, p.29A.

- (4) *Ibid.*, p.28A.

- (5) 「"バットマン" リードマン」『夕刊フジ』、1990年1月14日号(13日発行)、11頁。

- (6) 堀内 克明 他編、『最新英語情報辞典、第2版』小学館、1986、s. v. "HBO," "Show Time." ケーブルテレビ(CATV)全体で契約数は4,548万世帯で年間売上高は114億ドルに達する、「ソニー米社買収の波紋」、9頁。

- (7) *Ibid.*, p.9. VCRの普及率は1987年ごろ50%を超えたと考えられる。Richard Gertner, ed., *1987 International Television & Video Almanac, 32nd ed.*, New York: Quigley Publishing Company, 1987, p.351.

- (8) 「"バットマン" リードマン」、11頁。セル(販売)のビデオの場合、1988年の売上額は79億ドルであった。「ソニー米社買収の波紋」、9頁。

- (9) 「相手国のイメージをどのメディアからうけとることが多いか」というアンケートによるとアメリカ人は

菊川：アメリカ映画における日本人の新しいイメージ

日本人に対してTV (35%)、新聞 (24%)、映画 (15%) という結果がでている。川竹和夫、『ニッポンのイメージ：マスメディアの効果』、NHK ブックス、1988、4頁。

- (10) 『日本経済新聞』、1988年3月18日号、1頁。1989年3月18日号、1頁
- (11) 「出入国者ビッグバン」『AERA』、1989年7月25日号、38—39頁。「海外旅行へ1,000万人時代」『朝日新聞』、1989年10月1日号、1頁。また留学生についても円高を反映して1988年度にはその数が84,708人に達しており、そのうち米国へは年間約3万人ほどが留学している(観光ビザによる短期留学が除く)。『留学ジャーナル』、1989年秋号、40頁。
- (12) 日本男性の白人女性コンプレックスに関しては1983年の *TIME* (日本特集号) にも "Japanese men are obsessed with foreign women, particularly blond.... Almost all Western features are regarded as sexy." と紹介されている。"Waterbeds and Willow World," *TIME*, August 1, 1983, p.71.
- (13) この映画は4,214万ドルの製作費をかけ3日間で971万ドルを稼いだとされている。『朝日新聞』、1989年9月8日号(夕刊)、20頁(広告欄)。

参考文献

- 川竹 和夫、『ニッポンのイメージ：マスメディアの効果』、NHK ブックス、1988
- 木村 由美子、「メロカのテレビ描かれた“日本”」『放送研究と調査』、1987年6月号
- シーラ・ジョンソン (鈴木 健次 訳)、『アメリカ人の日本観：ゆれ動く大衆感情』、サイマル出版会、1986
- 「特集日本のイメージ」『CAT』、1989年4月号
- 別枝 篤彦、『世界の教科書が示す理解されない国ニッポン』、祥伝社、1988
- 猿谷 要、『クジャクになった日本人』、光文社、1989
- タイムブックス編集部、『TIME 誌が見たニッポン：模索する大国ニッポン』、西武タイム、1983
- タイムブックス編集部、『タイム誌世界へのメッセージ：誤解される日本』、西武タイム、1986
- Ephraim Katz, ed., *The Film Encyclopedia*, New York: Perigee Books, 1982.
- Leonard Maltin, ed., *Leonard Maltin's TV Movies and Vide Guide, 1990 ed.*, New York: New American Libraty, 1989.
- Richard Gertner, ed., *1987 International Motion Picture Almanac, 58th ed.*, New York: Quigley Publishing Company, 1987.
- Richard Gertner, ed., *1987 International Television & Video Almanac, 32nd ed.*, New York: Quigley Publishing Company, 1987.
- Sheila K. Johnson, *The Japanese Through American Eyes*, Stanford: Stanford University Press, 1988.

この研究は日本時事英語学会第31回年次大会 (1989年10月7、8日、芦屋大学) において口頭発表したものを論文の形式に書き改めたものである。